

ベトナム人留学生の進路選択自己効力と キャリア探索行動の関連 —コンピテンシー育成に着目した日本語学校の キャリア支援に向けて—

Relation between Career Decision-Making Self-Efficacy and Career Exploration of Vietnamese Students —Towards Career Support focusing on Competency Development at Japanese Language Schools —

鍋 島 有 希
NABESHIMA Yuki

キーワード

〔進路選択自己効力〕 Career Decision-Making Self-Efficacy

〔キャリア探索〕 Career Exploration

〔キャリア支援〕 Career Support

〔コンピテンシー〕 Competency

〔日本語学校〕 Japanese Language School

1. 背景と目的

グローバル社会を迎え、近年では OECD が提唱するキー・コンピテンシーや 21 世紀スキルやのように、社会でキャリア形成するための能力やスキルが求められるようになった。文部科学省はコンピテンシーを「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力（文部科学省 2006）」と定義し、あらゆる側面においてコンピテンシーの育成を推進している。こうした能力やスキルとも称されるコンピテンシーは、進路選択において進路選択自己効力を媒介し自律的なキャリア探索行動に繋がることが報告されている（渡辺 2018）。

近年、日本社会において、日本国内で就職する外国人留学生数が増加している。日本語教育振興協会（2018）によると、日本語学校に在籍する約 7 割の留学生が日本国内の高等教育機関へ進学している他、日本語学校から直接日本企業へ就職するケースも増加している。そのため、日本語学校は留学生が日本社会でキャリア形成をするための重要なキャリアパスとなっている。

日本語学校に在籍する留学生の国籍は以前に比べると変化しており、現在は中国の次にベトナム出身の留学生が最も多く在籍している。こうした非漢字圏出身の留学生は、日本語習得に

時間がかかることが報告されている（佐藤・堀江 2015）。すなわち留学生は限られた時間の中で受験対策と進路選択の2つを同時に行なわなければならない、留学生と多くの時間を共有する日本語教師や科目担当者は、こうした状況に対して様々な取り組みを行なっている。しかし、実践的立場に立つならば、どのような教育的配慮が留学生の進路に関する能力や進路選択自己効力に有効なのか明らかにしておく必要があるだろう。近年では、短期的な進路相談ではなく、長期的な視点を取り入れたキャリア支援の必要性が求められているが（酒井 2015）、コンピテンシーはそうした長期的な視点を持った留学生のキャリア形成へ有効な手段になると考えられる。そこで本研究では、コンピテンシーの育成が日本語学校で学ぶ留学生のキャリア支援への有効な手段となる可能性について検討することを目的とする。

II. 先行研究と課題

1. 進路選択自己効力とキャリア探索行動に関する研究

進路選択自己効力は、「進路選択に関わる課題に直面した時、自分はそれに対応するための行動をとれるという見通しに関する自己認知（富永 2006）」のことである。この進路選択自己効力は、直接的にキャリア探索行動に影響を与えるものであり、進路選択自己効力が高いほどキャリア探索行動が活発に行われることが報告されている（安達 2001）。つまり、個人の「できそうだ」という意識がキャリア探索行動に作用する（Betz 2001）。こうした進路選択自己効力は、その構成について議論が分かれている。進路選択自己効力が1つの要素しか持たないとする報告がある一方、日本の文脈では複数の構成要素があるという報告がなされている（富永 2008）。

一方、キャリア探索行動は、自己について考え評価する自己探索と、仕事の世界について情報を得る環境探索の2つから構成されている（Stumpf, Colarelli & Hartman 1983）。これら2つの要素は探索行動を行なう時期により、重さが置かれる行動に違いがあることが指摘されている。キャリア探索の初期は、自己概念を特定するための自己探索が中心に行なわれ、進路を決定する時期には、環境探索に比重が置かれることが指摘されている（Blustein, D.L. 1989）。

安達（2010）は、日本の大学1年生から3年生を対象に初期段階のキャリア探索について分析した。環境探索および自己探索に該当する項目の平均値を求めた結果、初年次におけるキャリア探索では、環境探索より自己探索が積極的に行なわれていることを明らかにした。また、初期のキャリア探索には、「情報収集」、「自己理解」、「他者から学ぶ」の3つの側面があることを明らかにし、「他者から学ぶ」という行動は、これまでの先行研究で示されてきた環境探索と自己探索の双方と相関があることを明らかにした。このように、キャリア探索行動は、進路発達過程における初期か後期かという時期により性質が異なること、そして、複数の構成要素があることが明らかにされている。

2. 進路選択自己効力とコンピテンシーに関する研究

Bandura（1986）は、進路選択自己効力を高めるためには、「遂行行動の達成」、「代理的経験」、「言語的説得」、「情動的喚起」の4つの経験が必要であると述べている。こうした指摘に対して近年では、経験と進路選択自己効力との間に進路選択能力が存在し、この進路選択能力が媒介することで進路選択自己効力が高められることが報告されている（Paulsen, A.M. & Betz

2004, 富永 2010)。富永 (2010) は、日本の高校生を対象に進路選択能力と進路選択自己効力、進路探索行動との関連について分析し、学習から得られた進路選択能力は進路選択自己効力を媒介して進路選択行動に影響を与えることを明らかにした。また、進路選択自己効力は、進路選択能力と進路選択行動の媒介変数として大きな役割を果たすことを明らかにした。このようにコンピテンシーに着目した研究では、経験は能力を媒介し、能力は自己効力を媒介して行動を促すモデルが示されている。

渡辺 (2018) は、大学教育で育成すべきコンピテンシーの中から、自己学習力、自発性、ストレス耐性、チームワーク、リーダーシップ、異文化理解の6つを取り上げ、これらのコンピテンシーが進路選択自己効力へ与える影響について分析した。その結果、コンピテンシーが学業自己効力と進路選択自己効力の双方へ正の影響を与えることを明らかにし、様々な教育機会 で育成されるコンピテンシーが進路選択自己効力へ影響を与える可能性を示した。

3. 日本語学校を対象とした進路選択自己効力に関する研究

日本語学校を対象とした研究において、村越 (2011) は中国人留学生と韓国人留学生の進路探索自己効力に影響を与える教職員の進路サポートについて分析した。その結果、国籍に関わらず、留学生の「情報収集」と「計画遂行」という2つの行動は、教職員のサポートから影響を受けるが、そのサポートの内容は出身国によって異なることを明らかにした。

酒井 (2015) は、中国人留学生の進路選択自己効力とキャリア探索行動との関連について分析した。その結果、中国人留学生の進路選択自己効力には4つの構成要素があり、キャリア探索行動には「環境探索」と「自己探索」の2つの行動があることを明らかにした。そして、進路選択自己効力の「情報収集」と「計画遂行」の2つのみがキャリア探索行動の「環境探索」に正の相関があることを明らかにした。こうした結果を受けて、中国人留学生は、両親を含めた親類関係者からの承認および、外部に対して対面が保てることを意識しキャリア探索をする特徴があることを示した。

このように、日本語学校の留学生を対象にした進路探索自己効力の研究では、出身国により特徴が見られる他、進路探索自己効力には複数の構成要素があり、それらの一部がキャリア探索行動と関連があることが明らかにされている。

4. 研究課題

前述の進路選択自己効力に関する研究の結果を踏まえると、コンピテンシーを育成する教育や学習が能力を発達させ、能力が進路選択自己効力に作用し、キャリア探索行動が起こるモデルが示される。これらの結果に従うならば、日本語学校に通う留学生においても、キャリア探索行動に影響を与える進路選択自己効力の構成要素は、コンピテンシーと関連することが示される。

しかしながら、日本語学校の留学生を対象とした進路選択自己効力の研究では、主に中国の留学生を対象とした研究が進んでおり、管見の限りにおいてその他の国籍での検証が進められていない。その背景にはこれまで日本に留学する学生の多くが中国からであったことが考えられる。しかし、近年の日本語学校では、ベトナム等の非漢字圏からの留学生が多く在籍しているため、中国や韓国以外の出身国に着目し、その特徴を検討する必要があるだろう。特に、安達 (2010) らが指摘するようにキャリア探索を行なう時期により行動に違いがあることを鑑み

ると、来日した時から始まっている留学生の日本社会でのキャリア発達を明らかにするために、まず初年次の実態を明らかにする必要があるであろう。

以上のことから、本研究では、ベトナム人留学生の進路選択自己効力およびキャリア探索行動の構成要素を明らかにし、そのような関連があるかについて分析する。得られた結果より、どのようなコンピテンシーがキャリア支援として有効なのか検討する。

III. 方法

1. 質問紙の構成

本研究で用いた質問紙は、進路選択自己効力とキャリア探索行動に関する質問、性別・国籍等のフェイスシートで構成されている。

進路選択自己効力の尺度は富永（2006）の16項目を採用した。この尺度は日本の高校生を対象に作成されたものである。日本語学校に在籍する留学生は日本の高等教育への進学や就職を意識しており、日本の高校生の進路選択過程と類似するため、この尺度を利用した。

進路選択自己効力の質問項目に対して「進路を決めることにどれくらい自信がありますか」と尋ね、「とても自信がある」から「全く自信がない」の7段階評定でもとめた。

キャリア探索行動の尺度は、酒井（2015）を使用した。この尺度は、Stumpf, Colarelli & Hartman（1983）の環境探索行動7項目と自己探索行動の5項目を邦訳し、進学に関する質問に変換されたものである。これらの質問項目について、現在どの程度行なっているか、「非常によく行なっている」から「全く行なっていない」までの7段階評定でもとめた。なお、対象者では、進学に関するガイダンスや講演会は初年次向けにまだ行われていなかったため、このキャリア探索尺度の項目のうち、「進学に関連したガイダンスや講演会を聞きに行く」を除いた11項目を使用した。質問紙はベトナム語に翻訳した。バックトランスレーションにより等価性を考慮し、その適切さを確かめた。

2. 調査の手続きと調査対象者

調査対象は、福岡県に所在する日本語学校1校である。調査対象の日本語学校は、日本の高等教育機関へ進学する留学生を対象とした民間の学校であり、毎年、9割以上の留学生が大学や専門学校に進学している。2017年5月時点で1年生に約180人の留学生が在籍しており、出身国は、ベトナム、ネパール、ミャンマー、スリランカ、中国等である。この日本語学校では30程度の仲介業者から紹介を受けた学生の中から面接試験を行ない、留学生を選抜している。面接では、留学目的が明確であること、日本の生活に適応でき、日本語学習に積極的に励む姿勢を持つ学生を採用している。そのため、本データは、こうした日本語学校側の意図の影響を受けた留学生の特徴が反映されることが考えられる。

調査は2017年9月中旬に、対象の日本語学校に在籍する1年生全員に実施した。ベトナム人留学生に対しては質問紙を64部配布し、48部回収した（回収率:75.0%）。回答に著しく不備があるものを除いた46部を有効回答数（有効回答率:95.8%）とした。集計結果は次の通りである。ベトナム人留学生46名（男性20名、女性26名）であり、平均年齢は21.8歳（SD=2.88）である。全員が日本語のレベルが初級⁽¹⁾であり、来日して6ヶ月程度であった。

3. 分析方法

質問紙調査で得られた進路探索自己効力尺度とキャリア探索尺度の結果に対して統計分析を行った。統計分析は、因子分析（主因子法・プロマックス回転）である。進路探索自己効力とキャリア探索行動との関連性については、それぞれに得られた因子に対してピアソンの積率相関係数を算出した。この相関分析では有意水準を .05 と定めたが、分析対象は $p < .01$ とした。

IV. 結果

1. 進路選択自己効力の因子分析結果

進路選択自己効力の平均値および標準偏差は、表1の通りである。回転なしの主因子法で因子分析をしたところ、5因子が得られ、そのうち1つの因子は下位項目が1つのみで構成されていた。この5因子で信頼性を確かめたところ、 $\alpha = .546$ であった。しかし、下位項目が1つのみで構成される因子を削除すると $\alpha = .742$ となり、信頼性が高くなったため、該当因子を削除し4因子とした（表2）。

第1因子は「クラスの勉強がわからなかった場合、理解するために努力すること」、「5年先の目標を持ち、それにしたがって計画を立てること」のように、目標に向けて推し進めることに関する5項目が集約されたため、『計画遂行』とした。第2因子は「自分がしたい職業の仕事の内容を知ること」、「自分の興味に合う職業を選ぶこと」のように、自分自身の将来を選ぶことに関わる4項目が集約されたため、『目標選択』とした。第3因子は「自分の理想の職業を思い浮かべること」、「現在考えている職業の中から一つの職業を選ぶこと」のように、将来を計画することに関する3項目が集約されたため、『将来設計』とした。第4因子は「自分の才能をいかせる職業分野をいくつかあげること」、「先生や家族と自分の進路について話し合うこと」のように、計画を立て事前に準備することに関する3項目が集約されたため、『計画立案』とした。

表1 進路選択自己効力の平均値および標準偏差

項目の内容	平均値	標準偏差
1) 興味がある職業をいくつか言うこと	4.26	1.14
2) 自分の理想の職業を想像すること	5.07	1.08
3) インターネットを使って、入試や就職の情報を集めること	4.52	1.49
4) 将来の仕事に役に立つ免許や資格を取るための計画を立てること	4.85	1.49
5) クラスでの勉強がわからなかった場合、理解するために努力すること	4.98	1.24
6) 現在考えている職業の中から一つの職業を選ぶこと	5.02	1.24
7) 先生や家族以外の年上の知り合いに進路のことを相談すること	5.15	1.46
8) 将来、自分がどんな生活をしたいか分かったこと	5.74	1.25
9) 機会があれば、興味がある分野で働いている人と話すこと	5.41	1.53
10) 自分がしたい職業の仕事の内容を知ること	4.93	1.32
11) 親や友人が薦める進路でも自分に合っていないと思ったら断わること	4.70	1.56
12) 自分の興味に合う職業を選ぶこと	5.76	1.14
13) 5年先の目標を持ち、それにしたがって計画を立てること	5.57	1.24
14) 大学や専門学校、就職の情報を自分で集めること	5.00	1.35
15) 自分の才能をいかせる職業分野をいくつかあげること	4.93	1.36
16) 先生や家族と自分の進路について話し合うこと	5.26	1.31

表2 ベトナム人留学生の進路選択自己効力の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4
第1因子 計画遂行 ($\alpha=.733$)				
5) クラスの勉強がわからなかった場合、理解するために努力すること	.848	-.130	.167	.068
13) 5年先の目標を持ち、それにしたがって計画を立てること	.751	.385	.095	-.167
3) インターネットを使って、入試や就職の情報を集めること	.635	-.225	.352	.034
14) 大学や専門学校、就職の情報を自分で集めること	.590	.337	-.258	.291
7) 先生や家族以外の年上の知り合いに進路のことを相談すること	.463	.104	-.070	.292
第2因子 目標選択 ($\alpha=.666$)				
10) 自分がしたい職業の仕事の内容を知ること	.116	.779	-.076	-.067
12) 自分の興味に合う職業を選ぶこと	.077	.744	.010	-.216
9) 機会があれば、興味がある分野で働いている人と話すこと	-.282	.540	.452	.335
8) 将来、自分がどんな生活をしたいか分かること	-.118	.533	.435	-.075
第3因子 将来設計 ($\alpha=.729$)				
2) 自分の理想の職業を思い浮かべること	.132	.009	.863	-.261
6) 現在考えている職業の中から一つの職業を選ぶこと	.184	-.021	.533	.222
1) 興味がある職業をいくつか言うこと	.212	.243	.405	-.059
第4因子 計画立案 ($\alpha=.631$)				
15) 自分の才能をいかせる職業分野をいくつかあげること	.000	.028	-.175	.877
16) 先生や家族と自分の進路について話し合うこと	.212	-.191	.347	.445
4) 将来の仕事に役に立つ免許や資格を取るための計画を立てること	.103	-.276	-.001	.423
因子間相関 F1		.297	.288	.445
F2			.364	.520
F3				.336

2. キャリア探索行動の因子分析結果

キャリア探索行動の平均値および標準偏差は表3の通りである。主因子法による回転なしの因子分析を行い、スクリープロットおよび固有値を得たところ、3因子が妥当であることが示された。3因子による因子分析をしたところ、信頼係数は $\alpha=.780$ が得られた。因子分析の結果は表4に示すとおりである。

第1因子は「希望する進学先について詳しい人と話をする機会を持つ」、「将来、自分の進学先になりそうな学校について調べる」のように、興味に関わる学校探索についての3項目が集約されたため、『興味がある学校調査』とした。第2因子は「これまでの自分についてじっくり考えてみる」、「これまでの自分についてじっくり考えてみる」のように、自分自身に関わる5項目が集約されたため、『自己探索』とした。第3因子は「進学フェアや進学説明会に参加する」、「希望する進学先について詳しい人と話す機会を持つ」のように、情報に関する3項目が集約されたため、『情報収集』とした。

3. 進路選択自己効力とキャリア探索行動の相関分析結果

進路選択自己効力の4因子とキャリア探索行動の3因子との関連性を明らかにするために相関分析を行い、係数を算出した(表5)。

その結果、進路選択自己効力の『計画遂行』は、キャリア探索行動の『興味がある学校探索』、『自己探索』、『情報収集』の3因子と関連があることが確認された。キャリア探索行動の『興味がある学校探索』において $r=.463$ ($p<.01$)、『計画遂行』において $r=.438$ ($p<.01$)、『自己探索』において $r=.398$ ($p<.01$) であった。このことから、進路選択自己効力の『計画遂行』とキャリア探索行動の『興味がある学校探索』、『自己探索』、『情報収集』の3因子との間に中程度の正の相関があることが確認された。

進路選択自己効力の第2因子である『目標選択』は、 $p<.05$ の条件において『興味がある学校探索』、『自己探索』との間に低い正の相関が認められたが、 $p<.01$ という条件においてキャリア探索行動との相関は確

認されなかった。そして、進路選択自己効力の第3因子である『将来設計』には、キャリア探索行動の『自己探索』との間に $r=.382$ ($p<.01$) という低めの正の相関があることが確認された。さらに、進路選択自己効力の第4因子である『計画立案』は、キャリア探索行動の『自己探索』との間に、 $r=.465$ ($p<.01$) という中程度の正の相関が確認された。

表3 キャリア探索行動の平均値および標準偏差

項目の内容	平均値	標準偏差
1) 進学を希望する学校について調べる	4.46	1.44
2) 将来、自分の進学先になりそうな学校について調べる	4.59	1.42
3) 希望する進学先への先輩の進学状況や希望する進学先への自分の合格可能性について誰かに情報を得る	4.57	1.29
4) 希望する進学先について詳しい人と話をする機会を持つ	4.15	1.53
5) 進学フェアや進学説明会に参加する	3.91	1.47
6) 自分という人間についてよく考えてみる	4.96	1.21
7) これまでの自分についてじっくり考えてみる	5.17	1.14
8) 自分がこれまでに学んだり、経験したりしたことが進学とどのように結びつくかを考える	5.20	0.81
9) 希望する進学先について改めて考え直す	4.70	1.09
10) 自分がこれまでに学んだり、経験したりしたことから進学について新しい関連づけをしてみる	5.00	0.84
11) 興味がある専門領域についての知識や情報を得る	5.02	1.16

表4 ベトナム人留学生のキャリア探索行動の因子分析結果

	F1	F2	F3
第1因子($\alpha=.884$) 興味がある学校調査			
3) 希望する進学先への先輩の進学状況や、希望する進学先への自分の合格可能性について誰かに情報を得る	.978	-.210	-.001
2) 将来、自分の進学先になりそうな学校について調べる	.888	.088	-.050
1) 進学を希望する学校について調べる	.728	.118	-.008
第2因子($\alpha=.765$) 自己探索			
8) 自分がこれまでに学んだり、経験したりしたことが進学とどのように結びつくかを考える	-.013	.883	-.159
7) これまでの自分についてじっくり考えてみる	.047	.642	.025
6) 自分という人間についてよく考えてみる	-.076	.598	-.006
9) 希望する進学先について改めて考え直す	-.018	.594	-.021
10) 自分がこれまでに学んだり、経験したりしたことから進学について新しい関連づけをしてみる	.014	.493	.267
第3因子($\alpha=.786$) 情報収集			
5) 進学フェアや進学説明会に参加する	-.122	-.023	.883
4) 希望する進学先について詳しい人と話をする機会を持つ	.077	-.105	.820
11) 興味がある専門領域についての知識や情報を得る	.230	.256	.415
因子間相関	F1	.477	.571
	F2		.406

表5 進路選択自己効力とキャリア探索行動の相関分析結果

		キャリア探索行動		
		興味がある学校探索	自己探索	情報収集
進路選択自己効力	計画遂行	.463 ^{**}	.438 ^{**}	.398 ^{**}
	目標選択	.369 [*]	.365 [*]	.205
	将来設計	.217	.382 ^{**}	.247
	計画立案	.372 [*]	.465 ^{**}	.361 [*]

^{**} $p<.01$, ^{*} $p<.05$

V. 考察

日本語学校に通う初年次のベトナム人留学生を対象とした本研究では、進路選択自己効力には『計画遂行』、『目標選択』、『将来設計』、『計画立案』の4つの構成要素があることが明らかとなった。この結果は、日本の文脈において進路選択自己効力には複数の構成要素があるという先行研究の結果を支持するものである。そして相関分析の結果より、進路選択自己効力とキャリア探索行動の因子間において関連があることが明らかとなった（『計画遂行』と『興味がある学校探索』、『自己探索』、『情報収集』、『将来設計』と『自己探索』、『計画立案』と『自己探索』）。安達（2001）等が、進路選択自己効力がキャリア探索行動に直接影響を与えること実証しているが、こうした先行研究の結果を本調査の結果に照らし合わせるならば、本調査における進路選択自己効力とキャリア探索行動の関連性は、図1のように示すことができる。すなわち、進路選択自己効力の構成要素がキャリア探索行動の因子に影響を与えるというモデルが仮説として導き出せる。

それぞれの関連性を見ていくと、進路選択自己効力の『計画遂行』、『将来設計』、『計画立案』という3つの因子がキャリア探索行動の『自己探索』に関わっていた。このことから、キャリア探索において『興味がある学校探索』や『情報収集』という外部との関わりよりも『自己探索』という内面に関する行動に重きが置かれていることが考えられる。この結果は、キャリア探索

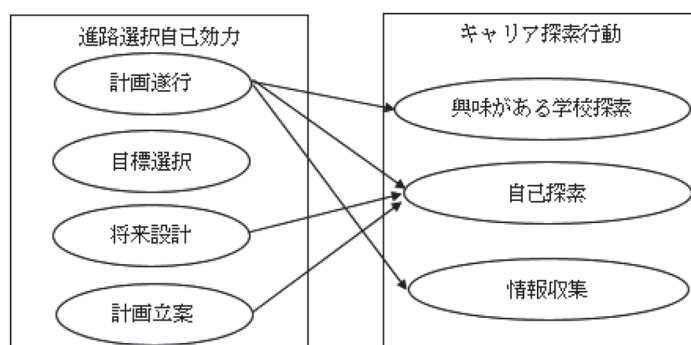


図1 ベトナム人留学生の進路選択自己効力とキャリア探索行動との関連

の初期は自己探索行動の比重が高くなる特徴があるという安達（2010）の結果を支持するものと考えられる。こうした結果が得られた背景の一つとして、来日した時期が考えられる。今回の調査を行なった時期は、ベトナム人留学生が来日して約6ヶ月の時期であった。この時期は日本での生活に慣れ、同じ日本語学校の先輩やアルバイト先での人間関係が構築される時期である。そのため、新しい環境に落ち着こうとする過程の中で様々な人間関係を通して日本の大学や専門学校等の進路に関する情報が入ってくるものと考えられる。同じ国の先輩や日本人の大学生等との関わりの中で進路に関する情報を得ると、自分自身の希望やキャリア展望と照らしてみるとという行為は自然な流れであろう。つまり、こうした学校や様々な人間関係を通して情報を得るという経験が、ベトナム人留学生の進路選択自己効力に作用したものと推測される。OECD はキー・コンピテンシーの一つに、「人生設計や個人の計画を作り実行する能力（文部科学省 2006 訳）」を挙げているが、進路選択自己効力の因子である『計画遂行』、『将来設計』、『計画立案』は、こうしたコンピテンシーとも類似する。コンピテンシーは様々な教育活動で育成され、進路選択自己効力を高める（渡辺 2018）ことを鑑みると、『計画遂行』、『将来設計』、『計画立案』を育成することが、日本語学校に在籍するベトナム人留学生のキャリア支援に有効な方策の一つであることが推測される。

また、今回の調査結果において、進路選択自己効力の『計画遂行』がキャリア探索行動の『興味のある学校探索』、『自己探索』、『情報収集』という全ての因子と関連が見られた。この結果は、ベトナム人留学生の『計画遂行』という能力やスキルの育成が、彼（女）らの『興味のある学校探索』、『自己探索』、『情報収集』という進路選択自己効力を高める可能性を示唆するものである。しかし、ベトナム人留学生の進路選択自己効力がすでに高いことも注目すべき点である。表1の進路選択自己効力の点数を見ると4.26～5.76であり、中点の3.0を上回っていた。日本人学生の進路選択自己効力の点数は中点を下回る状況（安達 2001）を照らし合わせると、かなり高い点数である。東・安達（2004）は、現実からかけ離れた高い自己効力を持つ場合、目標設定のレベルを誤ったり不準備のまま進路選択したりする危険性を指摘している。初年次の時点で進路選択自己効力が高いことは、積極的なキャリア探索行動が期待される一方で、生産的な結果に繋がりにくい危うさを同時に抱えることとなる。つまり、自己評価力を高めるメタ認知を育成する等、進路選択自己効力が高い傾向にある状況に配慮しながら『計画遂行』、『将来設計』、『計画立案』というコンピテンシーを育成するキャリア支援が求められるであろう。

VI. まとめと今後の課題

本研究では、コンピテンシーに着目したキャリア支援の可能性を検討するため、進路選択自己効力とキャリア探索行動の関連について分析した。その結果、進路選択自己効力の『計画遂行』はキャリア探索行動の『興味がある学校探索』、『自己探索』、『情報収集』と関連することが明らかとなった。また、進路選択自己効力の『将来設計』と『計画立案』はキャリア探索行動の『自己探索』と関連することが明らかとなった。この進路選択自己効力の要素はコンピテンシーと類似することから、日本語教育をはじめとする様々な教育実践の中でベトナム人留学生の進路選択自己効力を育成できる可能性が示唆される。すなわち、コンピテンシーを育成する内容を取り入れた日本語教育や試験対策等の教育実践は、日本語学校に在籍する留学生のキャリア支援の有効な方策となりうることが示される。日本語学校は最長2年と在籍期間が決

まっているため、限られた時間でいかによりよい進路選択ができるかが重要となる。初年次のキャリア探索行動の特徴を知り、キャリア探索行動を促すコンピテンシーを明らかにすることは、日本語学校で学ぶ留学生の自律した進路選択行動を促す一助となるだろう。

しかしながら、残された課題も多い。今回明らかとなった結果は限定的なものであり、今後、進路選択自己効力とキャリア探索行動との関係について更なる実証研究が求められる。また、日本語学校の教育現場で実践されている日本語教育等で育成されるコンピテンシーがどのようなものなのか、そしてそれらが進路選択自己効力にどのように作用するのか検証する必要があるだろう。今後、本研究で得られた知見を手がかりに、更なる実証研究が求められる。

後注

(1) 調査対象者が在籍するクラスでは、『みんなの日本語初級 I』及び『みんなの日本語初級 II』をテキストとして使用していた。

引用・参考文献

安達智子 (2001) 「大学生の進路発達過程—社会・認知的進路理論からの検討—」『教育心理学研究』 49 (3) pp.326-336.

——— (2010) 「キャリア探索尺度の再検討」『心理学研究』 81 (2) pp.132-139.

酒井彩 (2015) 「中国人留学生の進路選択自己効力と進路探索行動との関連—長期的目標であるキャリアという視点から考える進路サポートに向けて—」『高等教育と学生支援』 6, pp.19-25.

佐藤由利子・堀江学 (2015) 「日本の留学生教育の質保証とシステムの課題」『留学生教育』 20, pp.93-104.

富永美佐子 (2006) 「高校生の進路選択自己効力」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』 54 (2) pp.355-376.

——— (2008) 「進路選択自己効力に関する現状と課題」『キャリア教育研究』 25, pp.97-111.

——— (2010) 「高校生の進路選択の構造—進路選択能力、進路選択自己効力、進路選択行動の関連—」『キャリア教育研究』 28, pp.35-45.

日本語教育振興協会 (2018) 『平成 29 年度日本語教育機関実態調査結果報告』 一般財団法人日本語教育振興協会

東清和・安達智子 (2003) 『大学生の職業意識の発達—最近の調査データの分析から』 早稲田教育叢書

村越彩 (2011) 「日本語学校に通う学生の進路選択自己効力に影響を及ぼす進路サポート—中国人学生と韓国人学生の特徴」『異文化間教育』 34, pp.75-89.

文 部 科 学 省 (2006) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1399302.htm 2019 年 1 月 24 日閲覧

渡辺研次 (2018) 「基礎的なコンピテンシー、学習自己効力感、キャリア選択自己効力感が学業の粘り強さ、学業成績に与える影響」『大阪経大論集』 69 (2) pp.389-405.

Bandura, A. “*Social Foundations of Thought and Action: A Social Cognitive Theory*” Englewood Cliffs, N.J. (Prentice-Hall, 1986).

- Betz, N. " Career Self-Efficacy." In Samuel H.O., Frederik T. K., & Azy, B. (Eds.), *Contemporary Models in Vocational Psychology: a Volume in Honor of Samuel H. Osipow*, NJ (Lawrence Erlbaum Associates, 2001) pp.55-77.
- Blustein, D.L., The role of goal instability and career self-efficacy in the career exploration process, *Journal of Vocational Behavior*, 35 (2), (1989) pp.194-203.
- Paulsen, A.M. & Betz, N.E., Basic Confidence Predictors of Career Decision-Making Self-Efficacy, National Career, *The Development Quarterly*, 52 (4), (2004) pp.354-362.
- Stumpf, S.A, Colarelli, S.M., & Hartman, K., Development of the career Exploration Survey (CES), *Journal of Vocational Behavior*, 22, (1983) pp.191-226.